

A. スクリャービンの「神秘和音」の成立をめぐって
—初・中期ピアノ曲における和声語法の変遷からの考察—

秋庭佳代子 (関西学院大学)

アレクサンドル・ニコラエヴィッチ・スクリャービン (Alexsander Nikolayevich Skryabin 1872 モスクワ ~ 1915 同地) は、帝政ロシア最後の時代を生きた作曲家である。19世紀末、18世紀前半より約200年の間隆盛を極めたヨーロッパにおける調性音楽は、その基盤となる機能和声法の拡大、飽和から崩壊の危機に瀕し、この事態に意識的な当時の作曲家は、従来に代わる何らかの新たな音楽語法の案出を余儀なくされた。

スクリャービンの英語による初めての伝記を書いたイーグルフィールド・ハル (Eaglefield Hull 1876~1928) は、この点について以下のように述べている。

『・・・スクリャービンは新しい和音(chord)また音の組み合わせ(combination)を発見した。・・・何より注目すべきは、彼が実際、新しい作曲法を見出したことである。』

スクリャービンは新しい和声語法を創造したという意味において、クロード・ドビュッシー (Claude Debussy 1862~1918)、アーノルト・シェーンベルク (Arnold Schönberg 1874~1951) に並ぶ。

交響曲、管弦楽曲そして作品の大半をピアノ曲にもつスクリャービンは、それらの中で創作初期の属7、属9和音の多用、中期におけるその下方変位和音の連続使用を通じて調性を離脱する。それとともに1908年頃からその名で呼ばれるようになった属9の下方変位に付加6度音を伴う「神秘和音」と、それとは僅かに構成音の異なるいくつかの属9の変化拡大和音を創意し、後期には、それらの和声語彙のみの連結により楽曲を構成するスクリャービン独自のこれまでにない和声語法を確立する。

このスクリャービンの和声語法について、本発表では、彼の創作全期に亘って書かれたピアノ曲を取り上げ、その初・中期から調性離脱を経て、後期の和声語法の中心的語彙となった「神秘和音」の創意に至る過程を再検討する。彼の初期および中期に属するピアノ曲(5つのソナタと小品約160曲)の詳細な分析を通じて、それらに認められる彼の和声語法の変遷を辿り、すでに多くの先行研究を持つ「神秘和音」の成立についての新たな理解を示し、未だ難解なスクリャービンの後期の和声語法の解明のための手がかりを見出すことを試みるものである。